包帯と傷薬　Another――サンプル――

※今回も閲覧注意です。かなり閲覧注意です。読んだ後の苦情はご遠慮ください。

※陰茎をおろし金ですり下ろすシーンがあります。完全になくなることはありません。表面が摺られます。さすがにちょっと地雷の方が多そうなので、細かい描写はしていませんが、ご注意ください。

約５万一千文字です。

※受けの膀胱に酒を入れて、ペニスから直飲みします。

受けは攻めの尿を直飲みます。酒と尿の違い。

尿道（カテーテル）・疑似飲尿・飲尿・アナル舐め・陰嚢マッサージ・射精禁止・陰茎すり下ろし・オクラの棘責め

～サンプル～

「えっ？」

「怪我はないかな」

「あ、うん……大丈夫、でもここ……？」

日向と一緒に眠っていた。腕に抱きしめられて、温かくていい匂いの中で眠っていた――はずだった。なのに気付いたら真っ白な部屋にいた。

「……優輝くん、ちょっとこのままここにいてね」

日向の声は普段通り優しい。けれど少しだけ鋭さがみえた。怖くはない。でも、警戒している。その様子に少しどきっとしてしまう。

（こんなときなのに……）

かっこいいと思ってしまう。普段優輝に対するときはいつもにこにこ笑っているし、怒られることなんてほとんどない。

前回怒られたのは、日向が仕事で不在にしているときに昼食を食べなかったことだ。痛め付けられたばかりのペニスが痛くて鎮痛剤を飲んだらつい眠ってしまって、気付けば夕方になっていた。それで怒られた――というか、ちょっと叱られたのだ。

『昨夜は痛みであまりよく眠れなかったんだよね』

『はい……ごめんなさい』

ご飯を食べなかっただけでなく、日向が働いている間に眠りこけていたのだ。

『いいんだよ。でもお薬を飲む前にはちゃんとご飯を食べないと』

そう言って、それから敬語を遣ったことを指摘されたのだ。
『彰さん、ごめんね』
『はい。じゃあ次からはお薬の前にご飯を食べようね。それと寝るのはかまわないよ。怪我をしているんだから。むしろ家事をするより安静に寝ていてほしいかな』
『うん……あの、夜ご飯、抱っこで食べたい』
『じゃあ口移しで食べようか』
『うん！』
口移しでの食事は、怪我によって発熱したときにしてもらったきりだった。柔らかいプリンやゼリーをベッドで口に入れてもらったそのときだけ。だからすごく嬉しくて――結局怒られたという記憶よりその後の幸せな時間の方が想いが強い。
（またしてほしいな……）
起きたら知らない場所にいた――誘拐かもしれないのに呑気だなと自分でも思うけれど、きっと冷静でいられるのは日向が一緒だという安心感からだろう。
「優輝くん、体調は悪くない？」
「うん、大丈夫。彰さん、ここはどこ？」
「分からないな……それにドアも何もない」
あるのはベッドだけだった。白いベッド。白いシーツに白い布団。部屋には窓もドアもなくて、真っ白なだけの部屋。
「彰さん……」
急に怖くなってくる。まるで病院みたい。どこかの研究施設とかだろうか。そういえば前に観た映画に似ている気がする。昼間に一人で観ていたけれど、怖くて日向が帰宅してから一緒に観てもらったのだ。
「前に観た映画みたいだね」
「あ……」
「ん？」
「僕も同じこと考えてたから……」
こんなイレギュラーな状態だというのに、同じことを考えていたということが嬉しい。本当に呑気だなと自分でも呆れてしまうけれど。
「嬉しいな。優輝くんも思い出してたなんて」
やはり日向は責めたりなんてしない。そばに来て安心させる笑みをくれる。
「でもあの映画とは違うといいな」
その言葉には頷くしかない。だってあの映画では研究対象の人間を閉じ込めて色々な人体実験をした挙句、殺してしまったのだから。
「本当に何もないな……」
日向が室内を隈なく見て歩く。壁紙をそっと撫でたり、トントンと叩いて壁の中の反響音を確認してみたり。
「僕も行っていい？」

ここで待つように、と言われたのでベッドからは降りていない。日向は近藤に痛いことをさせるけれど、それ以外はとても大事に扱ってくれる。だからきっと知らない場所を歩かせたくないと思ってくれているんだろうな、と嬉しいけれど。

「うん、おいで」

ベッドを降りて部屋の端にいた日向の元に向かう。と、そのとき何かを踏んだような気がした。

「ん？」

しかもパキ、と音がした。急いで床を見る。床だって壁紙と同じく真っ白だ。でも何かがあった。真っ白な板のような。

「何これ……」

「危ないから触らないで」

過保護。けれどやはり幸せな気持ちになる。

足をどけて少し離れると、走り寄ってきた日向がそれを拾い上げた。

「タブレット……」

日向がそう呟いた途端、画面が点いた。文字が表示されている。

【ようこそ！　ここは出られない部屋です。この部屋から出たければ手を繋いで歩いてください】

出られない部屋、とは何だろう。ここはどこかのアミューズメントパークなのだろうか。よく分からないけれど、とりあえず隣にいた日向の手を握ってみる。

「優輝くん……」

「遊園地とかかなって思って」

遊園地に行ったことはない。でももしここが遊園地ならきっと楽しいだろう。日向と一緒だから。

日向の手を引いて歩いてみる。数歩歩いてみると、壁の一角にドアが現れた。

「見て！　ドアです！」

けれどドアにはノブがない。二人で前まで行くと、下から上に向かってドアが開いた。

「変なドア……」

横にスライドするなら自動ドアでよく見るけれど、下から上に向かって開くのを見るのは初めてだった。

「わ！」

けれどドアのことよりも、目の前に広がった綺麗な部屋に意識を奪われた。

「すごい！」

「うん。これは……一体どこなんだ？」

手を繋いで歩くだけで出現したドア。どこかに監視カメラがあるのだろうか。

部屋を見回ってみよう、と思ったときにピコンと音がした。二人で日向の手にあるタブレットを見る。

【ここは合体した状態で一緒に射精しないと出られない部屋です】

「何これ……彰さん……」

さっきは手を繋いで歩くだけだったのに。

メッセージアプリのようなものだろうか、と画面を見まわしても、そこには時間や電波強度の表示すらない。

【日向彰さんと優輝くん】
「なんで僕たちの名前……」
日向は画面を見たまま何も言わない。もしかして何か心当たりでもあるのだろうか。
「彰さん？」
「あぁ……いや、何でもないよ。これは何だろうな」
やはり日向にも心当たりがないのか。となるとやはりお手上げだ。
（それにしても……）
「あの……合体して一緒に射精って……」
「俺が優輝くんの中に入れて、一緒にイくって意味だろうね」
「……や……」
恥ずかしい。だってこのメッセージの送り主が誰かは分からないが、少なくとも二人の関係を知っているということだ。
【この部屋にいる間、現実世界では時間が経ちません。この部屋にいる間にお二人が病気になったり死亡することもありません】
一体これは何なのだろう。それに『現実世界』なんて。
「彰さん……」
それともここは『異世界』なんだろうか。まるでＳＦ映画のよう。
【制限時間もありませんが、お二人がこの部屋から出るには合体した状態で、一緒に射精しなければなりません。数秒の差は許容します】
（ここでセックスしろってこと……？）
【飲食も可能ですが、この部屋にいる間空腹や喉の渇きを覚えることはありません。また、飲食するとその分排泄が必要になりますのでご注意ください。なお、現在お二人の身体は完全洗浄済み、空間全体も無菌状態です】
タブレットの表示するメッセージが非現実的すぎてついていけない。一体何がどうなっているのだろう。
【この部屋のドアは全て開錠されておりますが、手を繋いでいなければ開くことはありません。風呂やトイレ、寝室等、どこに行くにも仲良く手を繋いでお過ごしください】
文字を読み、それから日向を見る。日向は真剣にタブレットを見て考え込んでいた。
（邪魔しちゃいけない……）
きっと脱出の方法というか、ここがどこなのか、犯人は誰なのかを考えているのだろう。
【何かご質問はございますか】
「質問……」
思わず声が出てしまった。慌てて日向を見るが、日向は優輝の心を読んだように「大丈夫だよ」と言った。
「まず、ここはどこなのか」
それは決してタブレットに向かって発せられた言葉ではなかった。ただの独り言。謎や問題点を列挙しようとしただけのような声だった。なのにタブレットは瞬時に画面を切り替えた。

【異空間とでも思ってください。お二人が普段生活している世界とは別の場所です】
それだけの文を打っている時間はなかった。日向が言葉を発した瞬間、一気に表示されたのだ。携帯やパソコンのように一文字一文字順番に表示されたのではなく。
「どうして俺たちを攫った」
今度はかなり小さな声だった。小さすぎて、すぐ隣にいる優輝にギリギリ聞こえる程度。でもやはりタブレットはすぐに画面を切り替えた。
【趣味です】
端的。けれど分かりやすい答えだった。
「……マイクか……？　優輝くん、タブレットを持って少し離れてくれるかな」
「あ、はい」
ついて出てしまった敬語。けれど気にせずタブレットを持って部屋の隅に向かう。
壁に背をついて日向を見る。日向も反対側の壁に寄りかかっていた。そして優輝をじっと見ている。
「彰さん？」
どうしたのだろう。どうしたらいいのだろう。そう思って首を傾げながら声を掛けると日向がこちらにやってきた。
「どうかな」
「え？」
タブレットを覗き込む。するとそこにはいつの間にか文字が並んでいた。
【この空間に存在できるのはお二人だけです。追加は認められません】
「何これ？」
さっきまでの文章と違う。それに質問への答えのようだ。
「タブレットにマイクが仕込んであるのかと思って小声で言ってみたんだ。ここに近藤を呼ことは可能かと」
「っ……」
近藤――それは日向が定期的にマンションに呼ぶ男のことだ。素性は何も知らない。ただ近藤と日向が呼ぶので近藤だと思っているが、それ以上のことは何も知らない。
「……ここから出るのに一緒に射精しないといけないなら……」
言いたいことは分かる。日向は『痛め付けられた可哀想な陰部の手当』をすることに興奮する人間だ。しかし優輝は痛め付けられても興奮はしない。痛みに泣き、ペニスは萎えるだけだ。
（僕たちがセックスして一緒に射精するなんて……）
そんなこと、これまで一度だってできたことはない。
二人のセックスにはサイクルがある。まず、ペニスや陰嚢の怪我が治ったら優輝が日向に見守られながら射精をする。その後で近藤が部屋に呼ばれ、日向は部屋の外で待機。その間に優輝は近藤にペニスや陰嚢をとことん痛め付けられ、終わると同時に日向と近藤が入れ替わる。そして何をされたのかを伝え、手当てをしてもらう。そして手当で興奮した日向を無傷のアナルで受け入れるのだ。でもこのとき優輝は痛みで勃起すらできる状態ではない。そして傷が癒えるまでお世話をしてもらい、傷が癒えたら見られなが

ら一人で射精をする――の繰り返しだ。優輝の射精の段階でセックスにならないのは、射精ができるほど回復した状態のペニスでは日向が一切興奮できないから。

つまり、日向が手当なしで興奮できるか、もしくは優輝が痛め付けられた状態で射精できない限りこの部屋からは出られないということになる。

「……彰さん……」

一緒に射精する方法として有力なのは――恐らく優輝が痛みに慣れてボロボロのペニスでも射精できるようになることだろう。開発されたアナルは快感を拾うことができるし、そもそも日向に手当なしでの興奮を求めるのは無駄だ。人の趣向なのだから。優輝が女性の身体に興奮できないのと同じように。

「……ごめんね優輝くん、今まで何度も普通に興奮できないか試したんだけど……」

「いいです」

「……優輝くん？」

早く遮りたくて、全てを言わせてしまいたくなくて出した声は思ったよりも硬くなってしまった。

「……あの、僕……僕自分で……その、おちんちん……痛くします……」

近藤がいないのなら自分でするしかない。日向は優しい人なので、人を痛め付けることはできないのだ。けれど手当しないと興奮できない。抱いてもらうには興奮してもらわなければ始まらない。

「優輝くん……」

「あの、その……多分、怖くてちょっとずつしかできないと思うし、その、痛いまま射精できるようになるまで時間かかるかもしれないけど、その……」

もし、面倒くさいと思われたらどうしよう。こんなところ早く出たいのに、優輝のせいでと思われたら。

「優輝くん……いいの……？」

「……だって……」

優輝はいい。仕事もしていないし、普段から家でゆっくりさせてもらっているだけだ。心の傷が癒えるまでと言って甘やかされ、家のことをしているだけ。でも日向は違う。仕事をしているし、きっと友達との付き合いだってあるだろう。

「ここにいる間は時間が進まないみたいだし、ずっとここにいてもいいんだよ」

「……僕だって、彰さんを独占したいけど……」

でも、前に聞いたことがある。テーマパークの行列とか、大きい公園にあるアヒルボートとかにカップルで行くと別れるという噂。理由はよく分からないけれど、多分つまりずっと二人でいると飽きてしまったり喧嘩が増えたりということだと思っている。こんな知らない場所で喧嘩するようにはなりたくないし、もし別れるなんてことになったら後悔してもしきれない。誘拐犯も誰なのか分からない状態では誰を責めることだってできやしない。

「……うん、分かった。でもゆっくり進めようね」

「はい……あの、僕が怖くて泣いても……泣いたりしたらごめんなさい」

泣いても許して怒らないで――そう言いそうになってしまった。でもそんなのはずるい。だって自分からすると言ったのだ。

けれど日向はどこまでも優しかった。

「泣いていいよ。泣いていいし、怖いとか痛いって言っていい。怖がってる心も痛い身体も大切にしたいよ」
「彰さん……！」
よかった。日向が優しい人で本当によかった。
「あ……けどどうやって……」
近藤や仕事では道具で痛め付けられた。手でするにも限界があるし、自分でするには歯も使えない。
「そうだね……一先ず部屋を見て回ろうか」

〜〜〜〜

「そうだ。セックスで射精できるようにするならしばらく禁欲してみようか」
「え？」
「いっぱい性欲が溜まって、うずうずしている方が射精しやすいんじゃないかなと思うんだけど」
「あ……そっか……」
確かにたくさん我慢してムラムラしているときなら痛みがあっても射精できるかもしれない。
「うん、分かりました」
「じゃあまずは一か月くらい我慢してみようか」
「……はい……」
一か月も射精できないなんて。せっかくペニスが無傷になったのに。尿道がちゃんと開かれているなら気持ちいいだけの射精をできそうなのに。
「……その前に気持ちいい射精しておく？」
「え……」
「ずっと、おちんちん引き攣るような痛みがあったでしょう。それに射精するにもスムーズに出なかったし」
「あ……」
気付いてくれていたなんて。
（嬉しい……）
日向の言う通り、傷は癒えても引き攣る痛みは残っていた。扱けば気持ちいいと思いつつ、ケロイドが皮膚を引っ張るような、突っ張るような感覚があった。それでも若さ故なのか快感には勝てなかったし、それまで耐えていた燃えるような激しい痛みに比べれば我慢できる程度の痛みだったから射精はできていたというだけの話。つまりずっと、気持ちいいだけの射精ではなかった。けれどその傷の一部は日向の為に作られた傷だったので、そんなこと絶対口にすることはできなかった。だから言わなかったのだけれど。
「綺麗なおちんちんのオナニー見せてくれる？」
「彰さんは……してくれないの？」
「してほしい？」
「うん……」

せっかくなら日向に扱いてほしい。今は無傷で手当てしてもらう場所はない。だからどんなに優輝が乱れてみても日向が興奮することはないのだけれど、それでもその手に愛されたい。
「じゃあベッドに行こうか」
「ん……」
自分だけ全裸。恥ずかしいけれど、ペニスの怪我の状態がひどいときは下着を拒否することさえある。そう思えばもう身体なんて見られ慣れているものの、やはりしっかりと服を着ている日向を見ると恥ずかしくなる。
「あの、服……」
「いらないよ。優輝くんの綺麗な身体、もっとずっと見ていたい」
「……はい」
その言葉が全てだ。日向のことを愛しすぎて、全て従いたく――いや、叶えたくなる。裸がいいなら、ペニスの怪我の手当をしたいなら、尿道口から直接酒を飲みたいのなら、全て叶える。そして喜んでほしい。
「横になろうね」
「はい」
さっき抜け出したばかりのベッドは、いつの間にかベッドメイクが施されていた。
「……人……じゃないですよね」
「だろうね」
この空間のおかしさはすでに気付いている。だって傷が一瞬で消えたのだ。やはりどう考えても人間技じゃないし、そうなるとここが異空間というのも受け入れるしかない。
「さあ」
「はい」
促されてベッドに横たわる。仰向きで、身体を隠すものは何もない。
「おちんちん、萎えちゃったね」
「歩いたから……」
でももうドキドキしているし、日向に触れられればすぐに勃起してしまうだろう。
「うん、触るよ」
恥ずかしい。自分一人興奮して、完全に冷静な状態の日向にペニスを擦ってもらって射精するのだ。
「はい……」
目を閉じて意識をペニスに向ける。本当は扱かれるところを見たかったけれど、刺激が強すぎる気がした。
「ぁっ……」
握られただけで勃起してしまった。けれど日向は何も言わない。日向自身、恐らくサディストではないのだろう。恥ずかしいこと言ってほしいな、と思うこともあるけれど、趣味じゃないのなら強制はできない。
「ぁ、んっ」

気持ちいい。しゅ、しゅとペニスが擦られる。すごい。引き攣りもなくて、気持ちいいだけの快感なんて。
「ぁあ、あああっ、ああっ」
（ダメ、出ちゃう……）
こんなの本当に久しぶりだ。そもそも射精自体月に二回程度しかしないのだ。傷が深くて痛みが残ると一か月しないことだってあるくらい。
「あああっ、彰さんっ、出ちゃうっ」
早すぎると分かっている。まだ触られたばかり。でももう無理だった。
「うん、出してごらん。久しぶりにスムーズに出せるよ」
「あ、あっ」
そうだ、今の尿道は潰れていないのだ。気持ち良くぴゅっぴゅと出せる。
「あ、イくっ、イくっ……あああ！！」
下腹部の奥が跳ねるような感覚。ドクンドクンと脈打つペニスは少し力を抜いた手で余韻を楽しませてもらう。
「あぁ……」
「気持ち良かった？」
「はい……すごいの……いっぱい出たぁ……」
尿道口が潰れていたときは、迫りくる精液をだらだらと溢すだけだった。粘り気があるせいで上手に出せず、手で押し出すようにして排出するときだって。
「可愛い。よかったね」
「はい……」
快感の波が過ぎると今度は罪悪感に苛まれる。だって今、優輝だけが気持ち良くなったのだ。日向は全く気持ち良くない。興奮すらできていない。
（僕だけ……）
「あの、おちんちん傷つけるから、手当て……」
興奮してもらうには傷を作るしかない。それもそれなりに深い傷を。
「優輝くん、気にしなくていいよ。さっきも言った通り優輝くんはまだ若いし、俺はもうおじさんだから」
「おじさんじゃない……！」
ひどい。日向自身であっても、大好きな日向のことをおじさんなんて言わないでほしい。
「うん、ありがとう。でも優輝くんほどたくさん射精しなくても大丈夫なんだよ」
「……でも……」
「それより、今日から我慢頑張ろうね」
「はい」
このときは、健康な状態のペニスでの禁欲がすごくつらいものだなんて知らなかった。

「出したいよぉ……」
「まだ一週間だよ」
時間の経過が知りたい――そうタブレットに言うと、何もなかった壁には窓が造られた。そして時計が設置され、カレンダーまでも飾られたのだ。特に季節は感じなかったので、カレンダーの一ページ目、一月一日から数えることにして、今日は一月七日。
「おちんちんむずむずする」
「うん、そうだね。若いおちんちんだから」
日向は一度も勃起すらしていない。朝起ちはあるようだけれど、だからと言って苦痛な様子は見られなかった。
「それよりほら、マッサージしようね」
「やだぁ……」
一か月の間にたくさん欲を溜めること――そうすればきっと痛みがあっても射精できる。そしたらセックスで一緒に射精ができる。
本心から現実に戻りたいと思っているわけではない。けれど日向には仕事があるし、二人だけの空間で別れるような事態にはなりたくない。それに、初めてセックスで一緒に気持ち良くなれるかもしれないという希望もあった。
だから、少しでも気持ち良くなれる可能性を高めるために――と日向は毎日何度も陰嚢をマッサージした。
「ほら、お約束でしょう」
「うぅ……」
マッサージの方法は簡単だ。ただ揉んでもらうだけ。けれどそのためには日向の足の上に置かれた手のひらの上に、自ら腰を下ろして陰嚢だけを置かないといけないのだ。それがすごく恥ずかしくて、そして興奮してしまう。けれどそれで勃起しても、ペニスには一切触れてもらえない。先走りをダラダラ溢してもただ陰嚢を揉まれるだけ。そしてマッサージが終わったら折り畳んだティッシュでちょんちょんと亀頭を拭かれて終わるのだ。
「ほら、タマタマを置いてごらん」
「はい……」
結局ここではずっと裸のまま。いつでも身体を見られるように。そしていつでもマッサージできるように。それだけでも恥ずかしいのに、こうして陰嚢を揉んで性欲を高めてもらう。
「もう少し……」
ソファに座る日向の肩に手を置いて、ゆっくりと腰を下げていく。
「あとちょっとだよ」
「うん……ぁっ」
陰嚢が手に触れた。でもあと少し。優輝がちゃんと陰嚢を差し出せるまで日向は手を動かさないので、揉める状態になるまではゆっくりと陰嚢を下ろさなければならない。
「ぁ、あっ……」

柔らかい陰嚢が手のひらの上で広がる。
「うん、そこでいいよ」
「あっ、あっ」
そっと感触を確かめるように手のひらに包まれ、それから中身を柔らかくするように揉まれる。こりなんてないのに。
「あっ、ああっ」
あまりの気持ち良さに腰が揺れる。
「こら。ダメだよ。タマタマが遠くなっちゃう」
「んっ、ごめんなさいっ」
無意識に上げてしまった腰をもう一度下ろし、日向の手の中に陰嚢を収める。
「うん、それでいい。おちんちん勃起しちゃったけど、ちょっと頑張ろうね」
「やぁああっ！」
苦しい。ペニスが痛い。傷もないのにズクンと痛む。
「おちんちん痛いっ」
「でも傷もなくてツルツルの可愛いおちんちんだよ」
「痛いぃ……出したいよぉ……」
これなら傷があって萎えている方がずっと楽だ。近藤にしてもらった後は痛みで勃起したいなんて思わないから。当然射精だって、むしろ考えるだけで震えるほど。

〜〜〜〜

「彰さん、お酒入れてください」
「いいの？」
「はい……恥ずかしいけど……飲んでほしいです」
ペニスから直接酒を飲まれる。本当に汚くないのか不安になるけれど、この二週間一度も尿意がないことを信じるしかない。
「ありがとう。じゃあおちんちんに管を入れるね」
「はい」
足を大きく開いて陰部を曝す。あとは日向がしてくれた。
尿道口からシリンジでローションの注入。これは尿道に薬を入れてもらったことがあるので大丈夫だった。それから管の挿入。痛かったけれど、もっともっとひどい痛みを経験しているからか、それほど強い痛みには感じなかった。
「ん……」
「痛いかな」
「大丈夫です。でも変な感じ……」
「優輝くんのおちんちんの穴は優秀だね」

日向が嬉しそうに笑う。
「彰さんが優しく手当してくれたから」
「ん？　でも今はもう傷はないよ」
「……薬、してもらうときの感覚とか」
「あぁ、そっか。このおしっこの穴、たくさん痛みや治療に耐えたからね。頑張り屋さんのおちんちんからお酒を飲ませてもらえるなんて嬉しいよ」
ゆっくり、様子を見ながら管が入れられた。そして奥――。
「あっ！」
「あ、気持ちいい？」
「何っ？」
「前立腺。お尻で弄られて気持ちいいところあるでしょう？　それをおちんちんの方から弄ってるから」
「あっ、あっ」
説明は聞こえている。けれど頭には入ってこない。
「ああっ、あんっ」
「可愛い。すごく気持ちいいんだね。しばらくここツンツンしてあげる」
「やぁっ！　イきたいっ」
「あ、それはまずいな。じゃあ膀胱に入れるよ」
「あっ！」
脳を突き抜けるような快感が消え、少し引っかかるような感じの後、管が動く感覚がなくなった。
「よし、膀胱まで入った」
「ん……」
「酒を入れるよ」
「はい……」
管の先端にシリンジが接続され、液体が注入されていく。普通では決して味わうことのない感覚。お腹が軽くなるのではなく、重くなっていく。
「苦しくない？」
「はい……けど重い……」
「じゃあこれくらいにしておこうか」
優輝はまだ未成年。飲んだことがないので酒の種類は分からないが、そのまま飲んで酔わないのだろうか。
訊けば教えてくれるだろう。でも丁寧に管を抜く様子を見ていると邪魔はできなかった。優しい手つきをじっと見つめる。ゆっくりと引き抜かれ、そして管が完全に抜けた。
途端、強烈な尿意。
「っ……ぁ、出るッ」
「少し我慢できるかな」
中にどれくらい入れられたのかは分からない。けれど膀胱に何かが溜まっている感覚が久しぶり過ぎて

戸惑う。
（おしっこの筋肉が力を入れるの忘れちゃったのかな）
そう思ってしまうほど尿意が強い。出したい。
「や、出ちゃうっ」
出るのは尿ではない。だから厳密にはお漏らしではない――そう思うものの、やはり自分の意思とは関係なくペニスから液体が漏れてしまうのは避けたかった。
「うん、じゃあゆっくり出してね」
そう言って何の躊躇いもなく、日向は亀頭を咥えてしまった。
「あ……彰さん……本当に……？」
上体を軽く起こし肘で支える。日向もベッドに寝そべるようにして太ももの間からこちらを見上げていた。整った顔がこくりと頷く。
（本当に……飲まれちゃう……）
咥えられたペニス。口内にあるのは亀頭だけなので、竿の部分だけが見えている。
（恥ずかしいっ……）
でも日向が望んだことだ。それに、こんな状況なのに優輝自身も少しだけ興奮してしまっている。
「……あきら……さん……出る……」
「ん」
咥えたままの返事。そしてちゅ、と先端を吸われる。
「っあ、ダメっ……」
尿道を熱いものが通った。

〜〜〜〜

「……彰さん、座ってて……」
「優輝くん……」
「なるべく……声、抑えるから……でもその……聞こえちゃったらごめんね」
「優輝っ！」
抱きしめられた。強い。こんなに強く抱きしめられたことなんて一度もない。
「ごめん……」
「彰さん……」
「ごめん……本当に……」
「……ううん、僕、三週間も彰さんを独占できて嬉しかったし。それに、その……まだ射精できるか分からないし……その、出来なかったらごめんなさい……」
「いいんだよ。いいんだ……」
それ以上日向の温もりを感じていたら決意が鈍りそうで、自ら胸を押し離す。
「……あの、終わったら……えっと……」

どうしよう、と思った。きっと痛みで歩くこともできないだろう。ボールギャグのベルトを外すなんてこともきっと手が震えてできないはずだ。けれど日向に気付いてもらえないと困る。

悩んでいると、今度はボタンが現れた。日向と目を合わせると頷かれたので押してみる。けれど何も変わらない。

「あ、もしかして」

日向の腕を引いてソファに座らせる。その状態でボタンを押すと、日向が声を上げた。

「分かったよ。それを押すとソファが震える。そしたらすぐに行くから」

「うん……お願いします」

キスがしたいな、と思った。けれどやはりそれをしたら覚悟が鈍りそうで、やっぱり無理だと泣きついてしまいそうでソファから離れる。

ベッドに置かれたままの耳栓とアイマスク。それを日向に渡してからもう一度ベッドに戻った。

目の前にあるのはおろし金と救急セットとボールギャグ。救急セットは日向に渡しておくよりここに置いておいた方がいいだろうと思った。だから、それは広いベッドの端に置いておく。

（怖い……）

ちらりと日向の方を見る。少し迷いながら、アイマスクと耳栓をするところだった。

（これでいい……）

日向の負担にはなりたくない。同じ部屋というだけですでに神経をすり減らしているだろう。少しでも日向の心の傷が増えないようにしなければ。

（怖い……）

「……彰さん……」

小声で言ってみる。けれど日向は微動だにしない。きっとソファの感触に神経を向けてくれている。揺れたらすぐに分かるようにと。

（怖い……怖いよ……）

たくさんの傷を負ってきた。けれど自分でしたことは一度もない。怖い。でもやらなければ。

（削ったら……そしたらおしっこ……飲めるし……抱いてもらえるし……）

そうだ、それに三週間も射精を我慢したのだ。陰嚢を揉まれ、亀頭を咥えられ、吸われ、膀胱から酒を飲まれながら耐えたのだ。夜は夢精しないようにと貞操帯まで着けてもらって我慢した。それが解放されるのだ。ペニスさえ削れば、あとはもう身を任せるだけで良くて、それにさっきすごく気持ち良かった前立腺をペニスで擦ってもらえる。そしたら自由に射精していいのだ。あぁ、それにおろし金なら尿道までは傷つかないだろう。そしたら射精も排尿もスムーズに行える。前のようにちょろちょろと漏れ出るだけにはならなくて済む。

（……よし）

深く息を吐いてそれからおろし金を持つ。やはり重い。怖い。金属のそれは安物のプラスチックとは雰囲気から異なっている。絶対に細かく摺り下ろしてやると言わんばかりの見た目。

（おちんちん……）

勃起は完全に萎えてしまっている。けれど勃起させないと、硬くないと摺れないだろう。

ペニスを握り扱く。何も感じなかった。気持ちいいはずなのに、あんなにも泣きながら求めていた刺激なのに、ぴくりとも動かない。

（どうしよう……）

でも今も、日向はソファが揺れるのを待っている。早くどうにかしないと――そう思っていると、ベッドに黒いものが現れた。

「あ……」

それはエネマグラだった。アナルから前立腺や会陰を刺激し、強制的に勃起させる道具。何度も店で使われた覚えがある。痛むペニスをこれによって勃起させられ鞭で打たれた。

甦るのは嫌な記憶ばかりだけれど、今はこれがあってよかったと思う。これなら自分の意思に関係なく勃起させることができる。

（でも……）

勃起してしまえば、もう言い訳はなくなってしまう。やはり怖いのだ。何か正当な言い訳ができればやめてしまいたいと思っている。

（でも……）

三週間以上、日向は射精していない。苦しいだろう。きっとものすごく苦しいはずだ。それを思うとこれ以上引き伸ばすことはできない。

ローションを取り出しエネマグラに掛ける。シーツにも垂れてしまったけれど、どうせ一瞬で綺麗になるのだからいいだろう。

てらてらと光るそれをアナルに当てると、そこだけはどうやら貪欲さを忘れていなかったらしい。くぷんとスムーズに飲み込んでいった。

「ぁ……」

身体を横たえ背を丸める。ゆっくりと息を吐くと、次第に快感が強くなった。

「あ……ああっ、あっ」

気持ちいい。前立腺が押される。気持ちいい。このまま扱いて射精してしまいたい。

（ダメ……）

今は射精のための勃起ではない。そっと身体を起こして四つん這いになりおろし金を持つ。

（どうしよう……）

ペニスは勃起している。けれど、どうやって擦りつけたらいいのだろう。シーツにおろし金を置いて腰を振るのか、それともエネマグラを無視してお尻をついて座り、手でペニスに擦りつけるのか。

（どうしよう……）

ちらりとまた日向に視線をやる。先程と何も変わっていない。でも待っている。ずっと、優輝がセックスの準備を終えるのを待っている。

（そうだ……準備だ……）

ペニスを痛め付ける。それは日向との関係においてはセックスの準備なのだ。幸せな時間のための準備。それに今頑張れば、あとはずっと甘い時間だ。何日も、時に何週間も甘くとろかされ、ペニスを大事に労わってもらう。その幸せな時間を思い出す。

（よし……）
座ることにした。それならペニスもおろし金も両方持てるから。入れたままのエネマグラが気になったけれど、幸い柔らかいベッドに埋もれるようにして、そして体重で更に会陰を圧迫するようにして座ることができた。
（よし……）
もう何度目の意気込みか。けれど一つ先に進める度に気をしっかり持っていないと恐怖に叫び出しそうになるのだ。
ボタンが近くにあることを確認して、それからペニスにおろし金を近付ける。
ちょっとだけ当ててみた。それだけでひやりとした感じや鋭さを感じ、背筋が震えた。
（やっぱり怖い……）
怖い怖い怖い。
涙がおろし金に落ちた。そしてそのまま流れていく。
ダメなのに。ちゃんとやらないと、ペニスを摺り下ろさないとダメなのに。
「うぅ……」
怖い――。
やっぱり止めていいよ――そう言って抱きしめてくれないだろうか。そんな弱い心で日向を見る。けれど日向は先程から少しも動いていなかった。
（うん……）
そうだよな、と思う。だって日向は摺り下ろされたペニスの手当を望んでいるのだ。
（でも好き……好きだもん……）
怖い。恐怖で少しずつ思考が幼くなっていく。
「うぅ……」
もう一度おろし金をペニスに当てた。でも怖い。冷たいし、尖ったところが触れただけで痛い。
やらなきゃ――でも怖い――やらないと――そんなことをぐるぐる考えていると、ベッドの上に三十センチ四方の黒い箱が現れた。
「何……？」
どうやら機械のようだ。箱の側面に穴が空いている。直径三センチくらい――ちょうど――いや、それ以上は考えなくても分かった。
（おちんちんを……入れるんだよな……多分……）
それをじっと見ていると、上部が蓋になっていることに気が付いた。そっと開けてみる。箱の内部が見えた。そして中にはちょうどさっきまで持っていたおろし金の形をした窪みがあった。
（ここに入れるのか……）
きっと自分でセットして、自分で穴にペニスを入れる――恐らくそれはこの部屋の主なりの譲歩なのだろう。
恐怖に震える手でおろし金をそこに嵌める。カチッと気持ちの良い音がしてぴたりと嵌った。
「……あとは……」

内部の機械がどう動くのかは分からない。でももう、やるしかなかった。
箱は軽い。膝立ちになり、箱を手に取りペニスに近付ける。でもやはり恐怖からか少し萎えてしまっていた。一度箱を置き、もう一度横たわって息を吐く。目を閉じて、前立腺の刺激に意識を向ける。
（ん……）
さっきの、日向の舌を思い出す。すごく気持ち良かった。アナルのシワを伸ばすように舐められるのも、ぬるりと中に舌を入れられるのも。そのあとの指だってすごく気持ち良かった。
「ぁ……」
想像をすればすぐだった。先走りを垂らすことはないけれど、しっかりと硬くなっている。そっと握ってみる。手を動かすと、ちゃんと快感を拾う。
（気持ちいい……）
これが日向の手だったら。きっと夢中になって声を上げただろう。
（あ、声！）
すっかり忘れていた。急いでボールギャグを咥えてベルトを後頭部で留める。それはマジックベルトだったので、震える手でも容易に扱うことができた。
（よし……）
もう一度ペニスを擦る。しっかりと硬くなっている。
膝立ちになり箱を持つ。そしてゆっくりと箱の穴をペニスに近付け――
（怖い……怖い！　やっぱり怖い！）
緊張と恐怖で胸が痛い。どくどくと鼓動が暴れている。
（怖いっ）
恐怖による吐き気なんて過去何度も経験しているのにそのどれよりも強かった。ドクンドクンと強すぎる脈動で胸も痛むし眩暈もする。
（でも……）
ドクンドクン。
（怖い……）
ドクンドクン――
ちらりと日向を見る。こちらに背を向けたまま何も変わらない。
（うぅ……）
ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン――
（怖い……けどっ……）
思い切って箱を引き寄せペニスを穴に入れた。止まっていたはずの機械。けれどペニスを穴に入れた瞬間、おろし金が動いた。

宜しくお願い致します！

gooneone